
歪

maneater

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歪

【Nコード】
N7550L

【作者名】
man eater

【あらすじ】
未定。とりあえずバトルものを考え中。

ジ・クという男（前書き）

続きを読みたいと思われた方は一言感想をください。一人でもおられたら頑張って続きを書こうと思います。

ジ・クという男

夜明け―そう錯覚してしまった。

月明かりに照らされる金髪。それだけでなぜかあいつだと思った。イラつくことに、安堵し口端を上げてしまう。けれども、いつもどおり、言い放った。

「死んだら許さん」

「分かつてるって」

こんな時でも？自分？なやつだと苦笑する。

「おまえを死なせやしないさ」

彼のその言葉は獣の咆哮にかき消された。

人が全力といえる力で剣をふれるのは一度だけ。どうしても2、3と数を重ねるにつれその威力は落ちる。

開幕、その一撃をふるう。

「あゝあゝあゝ」

と体制も考えずに体重をかけて。剣を折り岩を砕くその一撃も軽々と、易々と、弾かれる。刃は欠け、爪は勢いを失う。共に空中で一瞬静止。

先に動いたのは――動かされたのはより不安定であった刃。

「ふっ」

担ぎあげた格好になっっている剣に気合いをこめてふりおろす。

地面をたたく音が重なり辺りに響いた。

「…おかしいだろ」

ライオンのように見える全身を改めて眺め、そう呟かずにはいられなかった。象ほどもある巨体が、あのタイミングの一撃を飛び退いてかわしたのだ。すでに振られ始めていたというのに鼻先をかすめるのがやっと。呆れた身体能力だ。

「やってらんねー」

次いで、金髪の彼——フックは自分の手をちらりと見る。弾かれた際、手首から先がなくなっただかと錯覚した。気を抜くと今にも剣をおとしそうなほどしびれている。

（どうすっかなー）

警戒しているのか、獣は唸りながら周りを歩いている。

（短期決戦しかないだろうなー。狙うはー）

と、そこで

「ガアアア」

まるでコマが飛んだかのように迫る巨体。

たまらず横にとぶ。獣の姿を捉えようと起き上がりざま体を捻ったところで――

牙牙牙牙――ずらりと、ぞろりと、並ぶ牙。

反射的に剣に力を込める。ガギッ、と削るような音が耳にささる。

うぐ……ああ

内臓の潰れるような痛みにも声にならない嗚咽がもれる。

直後、全身にくる衝撃に息が止まる。そこでようやく空中に投げ出されたと気付いた。のたうちまわりそうになるが歯を食いしばり、いつの間にか手放してしまった剣を探そうと顔をあげ

ゾツと鳥肌が立つ。

空を仰ぐように顔を上げている獣。

（ヤバイ、何か分らないがともかくやばいっ）

転がるように走りだした彼のすぐ脇がオレンジ色に薙がれた

「うっ……え？」

命のやりとりの最中だというのに、激痛の中にあるはずなのに、目を奪われてしまう。

先ほど自分がいた辺りが僅かに照らされている。

炎だった。信じられないことに、このおかしな生き物は、ふざけたことに、火球をはいたらしい。

さらにもう一度顔を上げる獣に冷や汗がながれる。

（もし、もしも球状でなく扇状に吹き出すことができたとしたら）
考えが最後まで言葉になるより先に走り出していた。

（あんなモノがあつては瞬きの間で死ねる。これだけの隙もそうはないだろう。）

剣を拾った低い姿勢からさらに低く、一撃のはずの全力で、文字通り必死で

「ウオオオオ」

突きを放つ。

とうてい間に合うはずもない距離。のはずが、

剣は下あごを貫き、火球は髪を僅かに焦がした。

「グガアア」

叫びとともに暴れ狂う獣。剣を離すまいとありったけの力を込めると、ふわつと突然力が抜ける。偶然だが、必然のような、それは獣の真上。

「くたばれええ」

声に反応したのか、牙をむく獣の額に

ゴシヤア

その一撃は鈍い音を響かせ深々と突き刺さった。

実にあっけなく、物足りなくも、戦闘終了。

「あー大丈夫かな。これ」

距離をとってしばらく、どうやら殺せたらしいと警戒を弱めて大の字で寝転ぶ。もし何かきても逃げるのがやっとなだろう。逃げるといつても走れはしないが。最早指一本も動かしたくないような心境だが、自分だけではないのだ。ゴソゴソと、腰に付けているポーチをまさぐる。顔をすこしでもあげるとその大きさを嫌でも目に入るものがある。

「…俺ってすげー」

自分でしたことだが、よく殺せたなと呆れるでかさである。遠くから発見した時、即決でまわれ右をして逃げたそうと思ったくらいだ。彼が近くでじつくりと見るのはこれが初めてともいえた。少なくとも

も戦闘が始まってからは。だから気付かなかったのも無理はないかもしれない。

（あれ？なんかおかしい。…うん？鼻の傷が…）

それは考えるどころか、呼吸をわすれ心臓を止まらせるにも十分すぎる光景だった。

ぐるりと目玉が動き、人が丸ごと入る口が開かれ、その奥にはオレンジ色の――

「なっ」

夜が明けるほんの少し前の出来事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7550/>

歪

2010年10月28日08時08分発行